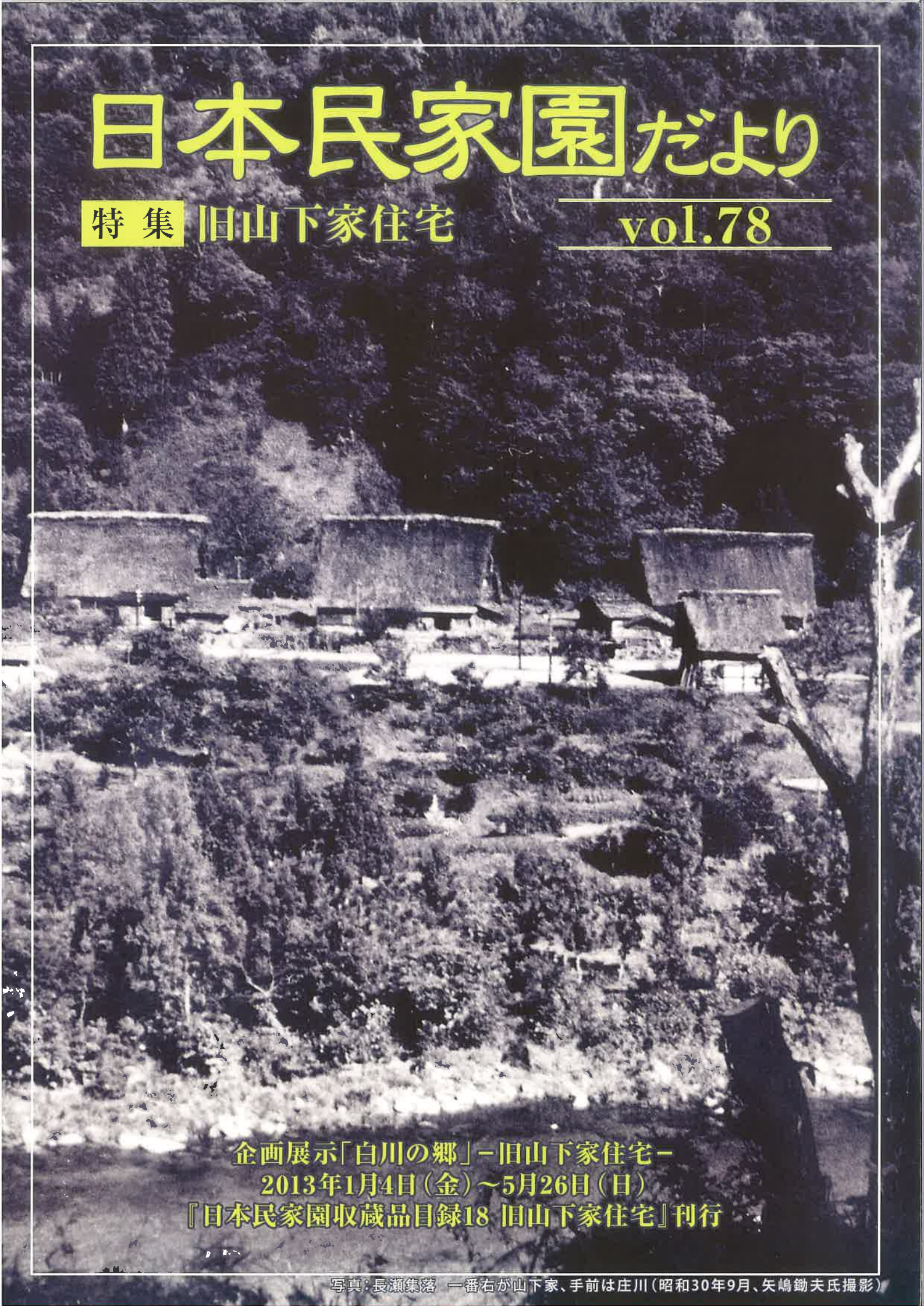
日本民家園だより

vol.78

特集 旧山下家住宅



企画展示「白川の郷」－旧山下家住宅－
2013年1月4日（金）～5月26日（日）
『日本民家園収蔵品目録18 旧山下家住宅』刊行

写真：長瀬集落　一番右が山下家、手前は庄川（昭和30年9月、矢嶋鋤夫氏撮影）

白川の郷 －旧山下家住宅の暮らし－

はじめに

岐阜県大野郡白川村は、荻町(おぎまち)集落が世界遺産に登録されてもなお、訪れるには便利とは言い難い土地です。ＪＲ高山駅からバスで1時間、山下家住宅のあった集落に入るには、バスを乗り換えてさらに30分、そこからまた15分ほど歩かなければなりません。日本有数の豪雪地帯でもあり、かつて冬場は交通が遮断され、正月帰省するのも難しかったといいます。

白川村長瀬は白川街道の対岸、庄川(しょうがわ)を渡ったところにあります。3軒(昭和30年ごろまでは4軒)しかない集落で、山下家は焼畑農業と養蚕を中心に暮らしを営んでいました。ここでは現当主・良忠さん(昭和7年生まれ)からの聞き取りを元に、昭和10～30年ごろの山下家の暮らしについてご紹介しましょう。

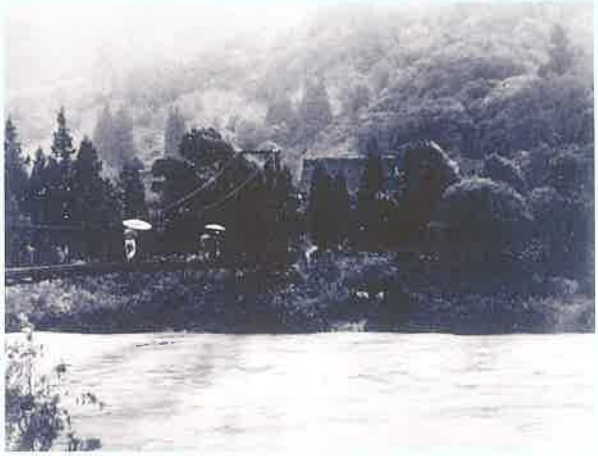
屋根

山下家住宅はいわゆる合掌造りですが、かつては主屋だけでなく、倉や小屋なども合掌造りでした。合掌造りを葺き替えるには、片屋根ずつでも大量の茅が必要です。そのため茅は、長ければ20年ぐらい刈り貯めました。小屋などに保管するのではなく、円筒形に積み上げ、屋外で保存するのです。何年かに一度は山を崩して日に当て、積み替えも行いました。

茅は2種類を使い分けます。斜面には太いカヤ(ススキ)、棟(むね、屋根の頂上部分)にはカヤとコガヤ(カリヤス)とを混ぜて使いました。棟には勾配がないため、細いコガヤを混ぜることで隙間をふさぎ、雨が染み込むのを防いだのです。

葺き替え周期は決まっていませんでしたが、7、80年持ったのではないかと良忠さんは言います。下で火をたくと長持ちするといわれますが、それだけではありませんでした。火をたかない倉なども同じくらい長持ちしたからです。雪の重さがかかると茅が締まり、水が内側に染み込みません。長持ちしたのはこうしたことも理由の1つだったようです。

1 山下家のハサゴヤ(現・飛弾民俗村)



2 長瀬集落へ続くつり橋(昭和30年代)

雪下ろしは一冬に2回ほど、雪の多い年は4、5回行いました。雪は上から下ろすため、まず棟まで登らなければなりません。はしごでひさしまで登ったら積もった雪を掘り、屋根の斜面に斜めに道を付けます。締まった雪は茅に食い付き、容易に登ることができましたが、下で火をたくと雪だるまのように雪が落ちることがありました。これを「マキオトシ」といい、下敷きになってけがをする人も多かったそうです。雪は下ろしてからも面倒でした。屋敷の裏手の田んぼは、雪を解かす池を兼ねたものです。

3 融雪池 右は現在の山下家

オチヤ

昭和46(1971)年3月に完成した山下家住宅の復原工事は、2つの点で当園の他の民家とは異なっていました。1つは、現地から直接移築されていないこと。もう1つは、建築当初の姿に戻していないことです。この住宅は川崎駅前で料亭として使われていたことがあり、民家園では休憩・展示施設として活用するため、この時代の改造をあえて残すことにしました。現在の入口も実は後から改築されたものです。

本来の入口は科学館側の側面にあり、現在の入口側には「オチヤ」と呼ばれる小屋が大きく張り出していました。

オチヤは平屋で、屋根は切妻型(きりづまがた)のクレ葺きです。「クレ」とは木を薄く割ったもので、荘川(高山市荘川町)の職人から取り寄せました。材料には一番日持ちの良いクリを使用しましたが、それでも3、4年に一度は「タレガエシ」という補修作業が必要でした。クレ板は釘では止めません。「シソ」と呼ぶ押さえ木を載せ、河原の石で固定するだけです。

このオチヤには2つの部屋がありました。1つは湧き水をトイで引いた「ミズヤ」、もう1つは作業場である「コヤ」です。コヤにはいろりがあり、養蚕シーズンは家族がここで生活しました。蚕は煙を嫌うため、主屋ではいろりに火が入れられなかったからです。

主屋(おもや)

現在、靴脱ぎ場と土間になっている場所には「ウスナワ」と呼ばれる台所と「ウマヤ」がありました。ウマヤの地面は1mほど掘り下げ、砂利もきれいに取り除いてありました。雪囲いに使ったコガヤや刈り集めた草を入れ、馬に踏ませて堆肥にしたのです。山下家では2頭の馬を飼い、軍馬の需要が高かった時代は種付けや子馬の出荷もしていました。出荷するときは、荘川で開かれた馬市まで引いていったそうです。

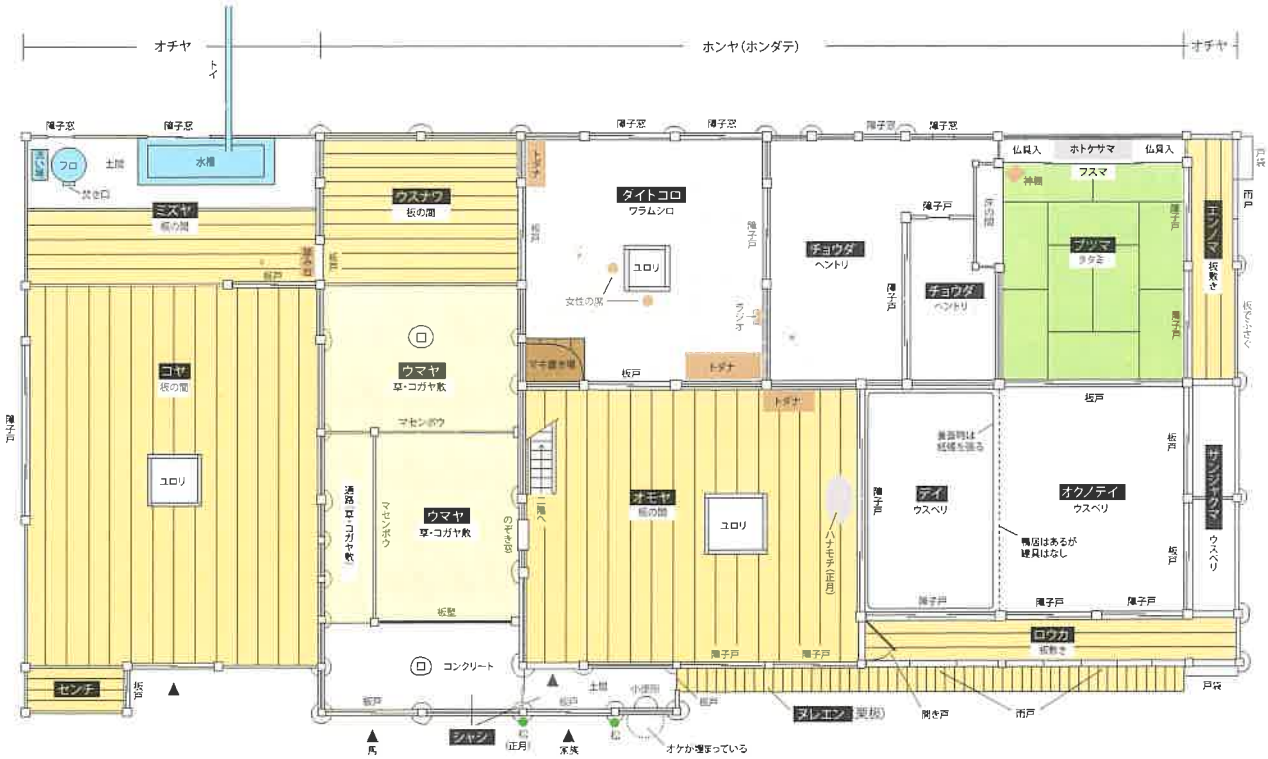
現在は靴脱ぎ場からすぐ立派な階段が続いていますが、これは料亭時代のものです。この階段の左手、ちょうど3階に続く階段の下に木製の突起がのぞいていますが、これが元の階段、すなわちはしごの先端です。

4 主屋正面(昭和30年代)

2階3階は養蚕の作業場であり、馬の餌にする干し草やわらの保管場所でした。良忠さんが育った時代、多いときは家族が20人ぐらいいましたが、上の階で寝起きする人はいませんでした。なお、2階3階の窓には下が板、上が障子になった戸が入っていました。他の窓も含め、移築するまでガラスは使われていません。民家園では台風の前に障子を板戸に入れ替えますが、そのようなこともしませんでした。

主屋の1階部分は、正面側(科学館側)と裏側(山田家側)に分かれます。

正面側には「オモヤ」「デイ」「オクノデイ」という3室が並んでいました。このうちデイは、卵からかえって間もない蚕の飼育に使われた部屋です。寒さを防ぐため、この時期は部屋いっぱいに和紙で作った



5 移築前の間取り

テントのようなものを張りました。オクノデイ、つまりそば店の座敷には現在も立派な板戸を見ることができます。一見押入れのようですが、ここは「サンジャクマ」と呼ばれる寝室でした。

裏側には家族の居間である「ダイドコロ」、寝室である「チョウダ」、それから仏間が並んでいました。

ダイドコロにはわらむしろが敷かれ、中央にいろりがありました。上には「アマ」と呼ばれる大きな棚があり、保存食にする魚などがつるされた他、雪に閉ざされる冬場は洗濯物もこの近くに干しました。燃料のマキは120cmほどもある長いもので、部屋の隅に立てかけてありました。マキは3〜4月ごろ山で切り出します。そして、積み上げたのち簡単な屋根を葺いて保管し、翌冬、雪を利用してソリで運びました。

仏間は唯一畳の敷いてあった部屋です。入ると正面にふすまがあり、開けると背丈ほどもある大きな仏壇がありました。仏壇のそばにはジュズカケがあり、家族それぞれの数珠が掛けてありました。白川村は浄土真宗の盛んな土地です。そのため年中行事は少なく、かつてはひな祭りも五月の節句もありませんでした。その中で賑やかだったのが「ホンコサマ」と呼ばれる秋の報恩講です。宗祖・親鸞の命日に行われる法会ですが、この部屋を中心に宴席を設け、ドブロクと春から蓄えた山菜などの料理で家族親戚楽しく過ごしました。この日、子どもたちは学校も早退したそうです。

6 山下家の仏壇

7 作業風景（昭和15年ごろ）

なお、この仏間の縁側と先程のサンジャクマは、オモヤから張り出した増築部分でした。さらに良忠さんによれば、仏間とオクノデイそのものがもともとは増築部分だということです。すなわち山下家住宅は、当初は一部屋分短い、小さな合掌造りだったわけです。

生業

山下家は農家です。しかし、山に囲まれて日照時間は短く、庄川に面した土地は耕せば砂利の層にぶつかり、水は豊富でも稲作には水温が低すぎるという厳しい環境でした。

そうした中、古くから行われていたのが「ナギハタ」と呼ばれる焼畑農業です。草を刈り、2、3週間乾燥させて火をつけるという方法で、山下家では昭和25(1950)年ごろまでアワなどを栽培していました。

養蚕も古くから行っていました。餌は山桑です。いわゆる桑畑はなく、桑の葉を求めて山の上まで登らなければなりませんでした。昭和23(1948)年、輸入品に押されて養蚕をやめると、山下家では林業を始めました。山桑を切り倒し、その跡地に杉を植えたのです。

この他自然環境を生かし、「マキガリ」と呼ばれる熊猟や、コイやニジマスの養殖も行っていました。

本文、写真3、6／渋谷卓男（当園学芸員）
図面／小澤葉菜（当園民俗担当嘱託職員）
写真1／高山市提供　2、4／矢嶋鋤夫氏　7／山下家提供

日本民家園だより　vol.78　発行：2013年1月4日

川崎市立日本民家園
〒214-0032　川崎市多摩区枡形7-1-1　TEL　044(922)2181　FAX　044(934)8652
交　　通　小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩13分
開園時間　[11〜2月]9:30〜16:30　[3〜10月]9:30〜17:00　入園は閉園30分前まで
休 園 日　月曜（祝日の場合開園）、祝日の翌日（土日の場合開園）、12月29日〜1月3日
入 園 料　一般500円、高校・大学生300円、65歳以上300円（川崎市在住の方無料）、中学生以下無料